

在日ネパール人留学生在異文化接触時に経験する社会生活上の困難

Social Life Difficulties of Nepalese Students in Japan: In Intercultural Contact Situations

山下 道世
Michiyo Yamashita

(要約)

本研究の目的は、在日ネパール人留学生在異文化接触時に経験する困難を明らかにすることである。具体的には、彼らが日本で暮らす中で感じる違和感や戸惑い、困難にはどのようなものがあるかを明らかにし、ネパール文化に対する理解を深めることに寄与するものである。西日本の高等教育機関で学ぶ在日ネパール人留学生6名に1人あたり1時間程度の半構造化面接を実施し、逐語録を作成したのちKJ法(川喜田, 2017)を用いて分析を行った。その結果【社会生活上の困難】と【対人行動上の困難】(中野, 2017)の2つの大項目に分けられた。そのうち【社会生活上の困難】は『社会規範の厳しさに関する困難』と『ヒンドゥー教に関連する困難』で構成されていることが明らかになった。

(キーワード)

在日ネパール人留学生、異文化接触、困難

1. はじめに

2008年に策定された「留学生30万人計画」の後押しもあり、日本で学ぶ外国人留学生数は増加傾向にある。2008年には123,829人であった留学生数は、2020年5月1日現在279,597人に増えた(日本学生支援機構, 2021; 2008)。地域別ではアジアが全体の94.6%を占めている。

そのうちネパール人留学生は中国、ベトナムに次いで3番目に多く、2013年の3,188人と比べ

ておよそ8倍の24,002人で留学生全体の8.6%を構成している(日本学生支援機構, 2021; 2014)。ネパール人留学生の増加の背景には、「南北の経済格差を背景としたネパール人移民の高い送り出し圧力と、日本の労働市場における新規労働力の枯渇という需給構造」(岩切, 2018, p.37)があるという。

このように日本で暮らす外国人が増える中、総務省は多文化共生を推進している。多文化共生は「国

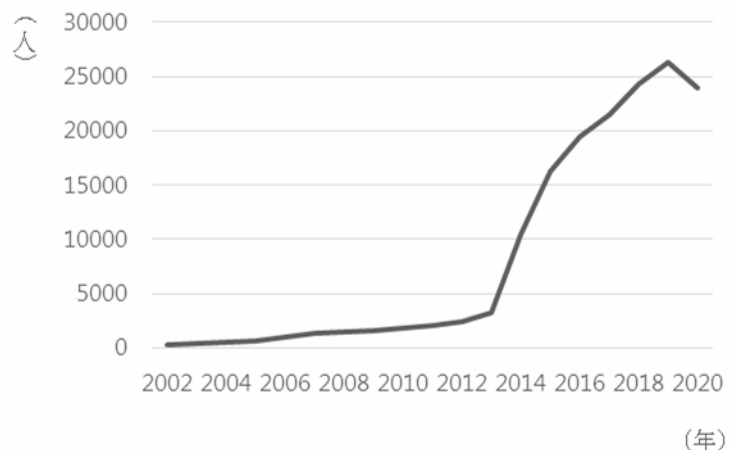


図1 在日ネパール人留學生数の推移

出所：文部科学省(2002; 2003)・日本学生支援機構(2004~2021)のデータより著者作成

籍や民族などが異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」(総務省, 2006, p.5) と定義されている。「互いの文化的ちがいを認め合」うことを目指すためには、外国人の日本文化への同化を期待するのではなく、日本人も外国文化を理解し柔軟に調整していく努力が求められる。そのためには彼らが日本で暮らす中で感じる違和感や戸惑い、困難にはどのようなものがあるかを明らかにし、ネパール文化に対する理解を深める必要がある。

2. 先行研究

在日留学生の社会生活上の主な悩みは、日本語(田中・田畑, 1991; 福岡市, 2018; 松原・岩隈, 1993)、経済(岩男・萩原, 1988, p.63, 徐・蔭山, 1994; 田中・田畑, 1991; 福岡市, 2018; 松原・岩隈, 1993)、勉強(田中・田畑, 1991)である。ほかにも上位ではないが、「新しい文化の異質さ」や「自文化の習慣の喪失」(田中・田畑, 1991, p.367)など、文化の問題も悩みとして挙げられている(福岡市, 2018; 松原・岩隈, 1993)。文化の問題が比較的少ない理由について、留学生の相談内容を分析した松原・岩隈(1993)は、「これらが他の問題の影響因になっているが、表面的には表れにくかった」(p.149)ことや「日本人に心理的な相談をするのに抵抗があること」(p.149)が推測できるとしている。

さらに、留学生の属する文化によって、困難に違いがあることも明らかになっている。例えば文化の共通性の認識に起因して、アジア系の留学生のほうが欧米系の留学生よりも「全体に障害の程度を小さく報告する傾向」がある反面、前者のほうが「日本人や日本社会の閉鎖性を強く感じている」ことが示されている(岩男・萩原, 1988, pp.137-138)。このような差異があるため、田中ほか(1990, p.78)も指摘するように、留学生をひとくくりにすることは適切ではなく、出身国ごとに研究する意義がある。

ところが、異文化適応に関する研究は中国人留学生を対象としたものを除いて、留学生の出身国別に調査した研究は少ないことが指摘されており(中野, 2017, p.9)、在日ネパール留学生についても例外ではない。唯一彼らの困難に焦点を置いた研究には、福岡県内の教育機関に在籍する留学生93名を対象としたアンケート調査がある。その調査から、先述の日本語と経済の問題に加えて「就職が大変」「アルバイトが見つからない」といった仕事に関する悩みも明らかになっている(柳, 2017, pp.120-121)。しかし、彼らの経験する文化的な困難については十分に検討されていないといえる。

このように文化差による困難の違いが示唆されている一方で、文化は決して国ごとに線引きできるほど単純ではないことを付け加える必要がある。10年ごとに実施される国勢調査によると、ネパールは2011年現在、126の民族と123の言語を有する人口26,494,504人の多民族多言語国家であり、ネパール語を母語とするのは人口の44.6%である(Central Bureau of Statistics, 2012, pp.3-4)。また、信仰されている主たる宗教の内訳は、ヒンドゥー教が81.3%と最も多く、次いで仏教が9%、イスラム教が4.4%である(Central Bureau of Statistics, 2012, pp.3-4)。今回の研究では考慮できてはいないが、ネパール国内の多様性の存在を念頭におくことが大切である。

3. 目的

この研究の目的は、在日ネパール人留学生が異文化接触時に経験する困難を明らかにすることである。具体的には、彼らが日本で暮らす中で感じる違和感や戸惑い、困難にはどのようなものがあるかを明らかにし、ネパール文化に対する理解を深めることに寄与するものである。なお、ここでは文化を

自分の所属している集団、自分の居住している地域などでは「あたりまえ」とされている共通の「考え方」「行動の仕方」「ものの見方」「対処の仕方」であり、ある状況においてどのように振る舞えばよいかについて瞬時に判断するときには個々人が知らず知らずに基準として考えているルールのようなものの集大成（石井ほか, 2013, p.14）。

と定義する。

4. 研究方法

本研究は、中野（2017）の研究方法を参考にして行った。調査協力者は、西日本の高等教育機関に在学するネパール人留学生6名である（表1）。2021年7月と10月に、調査協力者一人あたりおよそ1時間から1時間半の半構造化面接を行った。はじめに属性について尋ねた。その後、異文化接触時に経験した困難に関して、中野（2017）と同様の質問をした。具体的には、「生活するうえで困難に感じることは何か」、「やりにくさや戸惑いを感じることはあるか、あるとすれば、それはどのようなことか」、「日本人との関係はどうか」「日本文化や日本人の振舞いで、不快に感じることはあるか」、「日本人や日本文化について驚いたこと、ストレスを感じることはあるか、困難を感じることはあるか」、「日本人との人間関係において、問題に直面したことはあるか」の6つの質問をした（p.38）。これら以外にも「ネパールの友人が日本で勉強したり仕事をしたりしたいと言ったら、どんなアドバイスするか」、「信仰している宗教に関連して困ることはあるか」を尋ねた。その他にも話の展開に沿ってその時々に必要な質問をした。面接は日本語を中心に行い、必要に応じて英語を用いた。許可を得て面接をICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。逐語録の中から異文化接触場面における困難および戸惑いについて語られた箇所を抜き出し、KJ法A型（川喜田, 2017）を用いて分析した。具体的には、抜き出した語りを内容ごとにグループに分けて小項目を作成し、小項目同士で関連するものをまとめて中項目を作り、最後にその中項目を大項目に選別した。

表1 調査協力者一覧

調査協力者	年齢	性別	日本語力	宗教	滞在歴
A	20代	女性	中～上級	ヒンドゥー教	3年3ヶ月
B	20代	女性	中級	仏教	4年
C	20代	女性	中級	ヒンドゥー教	2年
D	20代	女性	中級	ヒンドゥー教	3年10ヶ月
E	20代	女性	中級	ヒンドゥー教	3年3ヶ月
F	20代	女性	中級	ヒンドゥー教	3年

5. 倫理的配慮

調査協力者に対して、研究の概要、調査への協力は任意であり協力しない場合でも不利益を被らないこと、また一度協力に同意してもいつでも辞退が可能であること、を口頭と文書で説明した。そして、個人情報の保護とデータ管理について説明したうえで同意書に署名をもらった。本研究は高田短期大学倫理委員会より承認を得た（承認通知番号 2021-1-1）。

6. 結果と考察

6.1 在日ネパール人留学生の社会生活上の困難

分析の結果、在日ネパール人留学生の異文化接触時の困難は【社会生活上の困難】と【対人行動上の困難】（中野，2017）の2つの大項目に分けられた。ここでは、そのうち【社会生活上の困難】に絞って結果と考察を述べる。分析に基づいて得られたカードは合計17枚（平均2.83枚、SD2.19）であった。

【社会生活上の困難】は、それぞれが複数の小項目から成る『社会規範の厳しさに関する困難』と『ヒンドゥー文化に関連する困難』の2つの中項目を含む（表2）。なお、口語体・文語体の違いになどによる日本語の難しさの問題や物価の高さなどの経済の問題についての語りは、今回の文化の定義には含まれないため除外した。小項目のカッコの数字は、語られたエピソードの数を表す。また、中項目のカッコの数字は小項目の合計を表す。語りの引用部分については、言い淀みは削除し、足りない言葉を四角カッコで付け加え、説明を丸カッコで補った。

表2 在日ネパール人留学生の社会生活上の困難

中項目	小項目
社会規範の厳しさに関する困難 (11)	・時間に厳しいこと (6) ・ルールが厳しいこと (5)
ヒンドゥー文化に関連する困難 (6)	・牛肉を含有する食べ物を避けること (3) ・祭祀の際に視線を向けられること (2) ・日本人女性の未婚・既婚の判別がしづらいこと (1)

6.2 社会規範の厳しさに関する困難

『社会規範の厳しさに関する困難』は、「時間に厳しいこと」と「ルールが厳しいこと」で構成されている。まず、「時間に厳しいこと」では、時間の融通が利かないことや時間厳守の考え方に対して戸惑いがみられた。例えば、一人のネパール人留学生は来日当日、空港から日本語学校に到着すると、休む暇もなくスーツに着替え走って入学式に出席するよう急かされたという。移動の疲れもあるなか、開始時間を少し遅らせれば済むところを、なぜそこまで厳しくするのか困惑していた。また、彼女によるとネパールでは学校でも仕事でも定時に行くことが一般的だが、日本では定時より10分～15分ほど早く着いて準備をしなければならず、戸惑っていた。さらに別の留学生は、この面接にも予定の時間に来なければならないと考え、「ドキドキして来ました」と語った。以前、約束の時間に行かなかった時に、厳しく言われた経験があるという。時間の厳しさについては、「日本に来た多くのネパール人学生が初めに困惑するのが、日本社会の時間に対する厳格さである」という見解と一致する（岩切，2018，p.42）。

また、この点は在日ネパール人留学生に限らず、インドネシア人など他国の留学生にとっても適応が難しいことが報告されている（筒井, 2018, p. 30）。

しかし、その一方で面接を行った留学生のうち1名は時間の厳しさを肯定的に捉えていた。ネパールでは例えばミーティングが1時に設定された場合、開始時刻は1時半や2時頃になるが、日本では設定された時刻に開始される点が良いという。先行研究でも時間の厳格さについて肯定的な意見を持つネパール人留学生（岩切, 2019, p. 93）やタイ・ベトナム出身の留学生（青木・安, 2018）がいることや、反対にアルバイトで「時間を守らない日本人学生に苦言を呈している」ネパール人がいることも報告されている（岩切, 2018, p. 42）。

Levine（1997 忠平訳 2002）の調査によると日本の公共の時計の正確さは31カ国のうち第6位であり、日本ではそれに価値が置かれていることが示唆される。また、時間感覚に関する文化差について、monochronic time（単一的時間）とpolychronic time（多元的時間）という概念を提唱したHall（1983; 1987）の見解とも共通している。具体的には、単一的時間では物事を1つずつ順に行うため時間の厳守に重点が置かれるが、多元的時間では複数の物事を同時進行し、人間関係が優先される。そして、日本はほとんどの場面で多元的時間が採用されているが、約束事に関しては単一的時間が採用されており、時間を守ることが重要視されているという（Hall, 1987, p. 23）。一方ネパールは多元的時間文化である（Nonis et al., 2005）。これらのことより、ネパールは日本より時間に対して寛容である可能性が窺える。以下に他の語りの事例を示す。

『社会規範の厳しさに関する困難』
「時間に厳しいこと」に関する語りの事例
「ネパールでは時間はこんなに厳しくない…（中略）[アルバイトで]10時に入って欲しいと言ったら、10時5分になってもあまり問題にならないから。でも、こっちは[出退勤の]カードを入れるから、10時から始まるなら10時ちょうどは駄目ですね。1分前[に]入れて欲しいと言うから。10時ちょうど[に]カード入れるのは、ダメと言いますから。終わった時も11時までやるから、11時1分2分ぐらいで入れてほしいから。ちょうど[の]時間にはダメだから。…入れちゃったら15分[分]ぐらい[給料を]減らす[と言われた]から。」(Eさん)

次に「ルールが厳しいこと」では、それについて言及したある留学生は、どんなルールが厳しいかとの質問に対して「全部だと思いますけど」と語った。日本社会のルールが全般に厳しいと感じていることが分かる。例としては、深夜のアルバイトからの帰宅途中で、車通りの無い道を赤信号で横断した際に、警察官に呼び止められ在留カードの提示を求められたが、携帯していなかったためわざわざ家まで来てカードを確認されたとのことであった。また別の留学生は、バスの中でも自由に会話したり通話したりすることができるネパールと違い、日本の電車の中では静かに過ごさなければならないことを挙げた。さらに、日本語学校のパーティーで先生に静かにするよう注意され、また、アパートで他の留学生がパーティーをした際には警察から学校に連絡があり、先生から注意されたことがあったという。パーティーでも思い切り楽しむことができず、「なぜ日本はこんなにつまらないのかなと思って」と語った。ルールの厳しさについても、ベトナムやオーストラリアなど様々な国籍の留学生の意見と共通している（筒井, 2018, p. 30）。しかし、一方で中国人留学生は日本人の長所として「ルールや秩序をよく守る」

ことをあげているという報告もある（徐・蔭山，1994，p.44）。

厳格なルールと人生の楽しみ方の関連性は、101カ国について国ごとに6次元の価値観を0～100までのスコアで測定した Hofstede, Hofstede, & Minkov (2010 岩井・岩井訳 2013) で指摘されている。そのうちの1つである「抑制 (0) -放縦 (100)」の指標について、抑制は「厳しい社会規範によって欲求の充足を抑え、制限すべきだという信念を示し…放縦は、人生を味わい楽しむことにかかわる人間の基本的かつ自然な欲求を比較的自由に満たそうとする傾向」と定義されている (Hofstede, Hofstede, & Minkov, 2010 岩井・岩井訳 2013, p.236)。それによると、日本のスコアは抑制寄りの40であるが、ネパールのスコアは92と放縦であり(宮森・宮林, 2019, p.307)、在日ネパール人留学生の語りを裏付けているといえる。また、Pelto (1968)の「tight society (きつい社会)」と「loose society (緩い社会)」の概念について33カ国で調査した Gelfand ほか (2011)は、「緩い社会」と比較して「きつい社会」では、バス、職場、パーティーなど日常の様々な場面においてより強い制約があることを明らかにした (Gelfand, 2011, p.1103)。数値が高いほど「きつい社会」で、最高は12.3、最低は1.6であった。日本の数値は8.6と33ヶ国の平均の6.5よりも2.1ポイント高い数値であり、比較的「きつい社会」であることが示されている (p.1103)。このように、日本は他国との比較においても抑制的で「きつい社会」であることが明らかになっている。ネパールは日本ほど抑制的で「きつい社会」ではないために、ルールの厳しさに対して困難に感じる事が推測できる。以下に語りを例示する。

『社会規範の厳しさに関する困難』
「ルールが厳しいこと」に関する語りの事例
「ルールが厳しい。例えば保険料とか、それを払わないと何回も電話。私1回そういうことになったんです。…電話かかってきて。私、ネパール人だから、ネパール語で手紙みたいなの来る。」(Bさん)

6.3 ヒンドゥー文化に関連する困難

『ヒンドゥー文化に関連する困難』は「牛肉を含有する食べ物を避けること」「祭祀を行うと視線を向けられること」「日本人女性の未婚・既婚の判別がしづらいこと」の3つに限定されている。ヒンドゥー文化に関する困難が限定的である理由として「インドのヒンドゥー教と違って、ネパールのヒンドゥー教には党派意識が薄く、信仰の面でも十分に寛容で自由主義的である」(タパ, 2020, p.338) ことが背景の1つにあると考えられる。

はじめに「牛肉を含有する食べ物を避けること」について、ヒンドゥー教では「牛は神聖な動物として崇拝され、牛を食べることは禁忌とされる」(国土交通省総合政策局観光事業課, 2008, p.23) という。ヒンドゥー教を信仰するある在日ネパール人留学生は買い物に行った際に、牛肉を避けるためにインスタントラーメンやコロッケパンなどの原材料を確認することに不便さを感じていた。また、一見それらが美味しそうに見えても、牛肉が含まれていた場合は購入できず、残念に感じていた。別の留学生によるとヒンドゥー教では牛は神様と考えられており、毎年 Tihar (ティハール) という数日間続くお祭りの一日に Gai Tihar (牛のお祭り) が開催され、牛に好物を食べさせたりシャワーを浴びせてきれいにしたりするという。さらに牛は2015年に法律でネパールの国獣として位置づけられ、食肉として殺す

ことが禁止されたため (The Times of India, 2015)、ネパール人は宗教に関わらず牛肉を食べてはいけないことになっている。日本では、牛肉を含む様々な宗教で禁忌とされる食物やアレルギー物質が原材料に含まれているかを絵柄で分かりやすく伝える「フードピクト」が開発されている (中井, 2021)。しかし、それを導入しているのは約 100 社と限られ、「フードピクト」を用いた商品を手にする機会は多くはないと想像できる。以下に語りの事例を示す。

『ヒンドゥー文化に関連する困難』
「牛肉を含有する食べ物を避けること」に関する語りの事例
「ヒンドゥー教で困ったことは牛肉が食べられない。ネパール人でもみんなかな。牛肉が食べられないことは。…ネパールでは牛は神様。国獣とって。…ですから牛を殺したとき、罰する法律もあるから。…弁当とか見る時においしそうだなと思うけど、牛肉もいっぱい入っててだめかなと思うこともあります。」(Aさん)

次に、「祭祀の際に視線を向けられること」では、Holi (ホーリー) や Dashain (ダサイン) というヒンドゥー教の祭りを祝う際に日本人の視線を浴びることに対する戸惑いについてである。例えば、ネパールでは春の訪れを祝って、色の付いた粉や色水を全身に掛け合うホーリーという祭りをを行う。それを日本の公園で友達同士楽しんだ後、帰り道で日本人に凝視されたという。また、ダサインは 10 日間続くヒンドゥー教最大のお祭りで、ドゥルガーという名の女神の祭祀を行う (寺田, 2020, pp. 331-313)。その最終日に米に赤色の粉を混ぜて作ったティカを額に付けるが、日本人は見慣れていないため視線を向けられると語った。ティカを外してはいけないとされているのは「お守り・息災等の意味がある」(ネパール観光庁, 2020) からだと推測できる。日本では色粉などを身体に直接付けることは珍しいため、注目的になったと考えられる。以下がその語りである。

『ヒンドゥー文化に関連する困難』
「祭祀の際に視線を向けられること」に関する語りの事例
「ヒンドゥー教は赤いティカという米に色を入れて。ダサインというヒンドゥー教の一番大きな祭り、日本に来て、私たちはそれするんですね。それで私たちは、この赤い米 [を]、[額に] こうやって乗せる。ネパールではこれを取ることは悪い、ダメというから、そのままにするから、あっちこっちに行ったら、みんな見る。恥ずかしくなる。日本人もびっくりする、多分。血かなと思ったかと思います。」(Eさん)

最後に、「日本女性の未婚・既婚の判別がしづらいこと」が挙げられた。1人の留学生によると、ヒンドゥー教では既婚女性にとって赤は重要な色であり、既婚女性は常に赤色の長い紐のようなものを首に掛け、額にはティカ、腕には赤いブレスレットを付けているため、一目で分かるという。そして、赤い紐をしないことは悪いこととされ、もし掛けていない場合は結婚相手が早く亡くなってしまうと考えられているという。しかし、日本の既婚女性はそのような習慣がないため、既婚・未婚の判断が難しいという。その語りを以下に示す。

『ヒンドゥー文化に関連する困難』
「日本人女性の未婚・既婚の判別がしづらいこと」に関する語りの事例
「日本は結婚している人かどうかちょっと見たら、すぐわからない。…ネパール人は女性だけすぐ見たら分かるので。…日本人を見たら…結婚してないねと思う。…これ (首に掛ける長い紐のようなもの) は大事。使わない女性はだめね。あんたなんで使わない? これを使わないと旦那さんがすぐに死

んでしまうという意味。こっち（ティカ）も大事。最近はここだけ（おでこと髪の毛の生え際あたり）だけど、昔はこっちまで（髪の毛の分け目のところ）。長い人は、旦那さんも長い間生きられる。」（Cさん）

7. まとめと今後の課題

本稿では、近年急増している在日ネパール人留学生を対象に、異文化接触時における社会生活上の困難について分析した。それには『社会規範の厳しさに関する困難』と『ヒンドゥー文化に関連する困難』があることが明らかになった。前者では「時間に厳しいこと」「ルールが厳しいこと」が挙げられ、ネパールは日本よりも比較的時間やルールが厳格ではないことが示唆された。次に後者は「牛肉を含有する食べ物を避けること」「祭祀の際に視線を向けられること」「日本人女性の未婚・既婚の判別がしづらいこと」で構成された。宗教による慣習の違いがあり、そのために困難が生じていることが示された。

本研究の限界として、まず調査協力者数が6名と少ないため、得られた知見は一般化できないことが挙げられる。本研究ではある一定の傾向が明らかになったが、在日ネパール人留学生全体の傾向を知るためには、調査協力者数を増やす必要があると考える。次に、調査協力者の民族や出身地域などの属性を考慮していないため、今後はそういった点も含めた検討が望まれる。

多様な文化に対する正しい理解と文化相対主義的視点は「多文化共生社会」を目指すうえで、私達にとって重要である。なぜなら、Levine (1997 忠平訳 2002) が主張するように「文化の背景をなす状況が十分に理解できていなければ、われわれはたぶん、その人びとの動機を誤解してしまう。その結果、必然的に衝突がおこる」(p. 261) からである。衝突を避けるためにも、まずは在日留学生の困難から浮かび上がる彼らの文化を理解する必要がある。そのうえで日本の「従来の慣例や決まり事の意義や目的を見直し、それらが創造力や柔軟性を妨げていないか熟考する」(筒井, 2018, p. 36) 努力が求められる。それが多文化共生への第一歩と考える。

謝辞

本研究の面接にご協力いただいた在日ネパール人留学生の皆様に深く御礼申し上げます。

引用文献

- Author Unknown. (2015, September 15). Cow becomes national animal of Nepal. *The Times of India*. Retrieved on August 26, 2021, from <https://timesofindia.indiatimes.com/world/south-asia/cow-becomes-national-animal-of-nepal/articleshow/49049371.cms>
- Central Bureau of Statistics, National Planning Commission, Secretariat Government of Nepal. (2012). *National Population and Housing Census 2011 (National Report)*.
- Gelfand, M. J., et al. (2011). Differences between tight and loose cultures: A 33-nation study. *Science*, 332 (6033), 1100-1104.

- Hall, E. (1983). *The Dance of Life: The Other Dimension of Time*. Anchor Books: New York.
- Hall, E. (1987). *Hidden Differences: Doing Business with the Japanese*. Anchor Books: New York.
- Hofstede, G., Hofstede, G. J., & Minkov, M. (2010). *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. 3rd ed. (ホフステード, G.・ホフステード, G. J., ・ミンコフ, M. 岩井八郎・岩井紀子 (訳) (2013) 『多文化世界—違いを学び未来への道を探る (原書第3版)』有斐閣.
- Levine, R. (1997). *The Geography of Time: The Temporal Misadventures of a Social Psychologist*. New York: Basic Books. (レヴィーン, R. 忠平美幸 (訳) (2002) 『あなたはどれだけ待てますか』草思社.
- Nonis, S.A., Teng, J.K. & Ford, C. W. A cross-cultural investigation of time management practices and job outcomes, *International Journal of Intercultural Relations*. 29(4), 409-428.
- Pelto, P.J. (1968). The difference between tight and loose societies. *Trans Action*, 5, 37, 37-40.
- 青木香代子・安龍洙 (2018) 「日本社会における東南アジア出身交換留学生の異文化理解に関する一考察」『茨城大学全学教育機構集グローバル教育研究』1, 13-27.
- 石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木敏行・石黒武人 (2013) 『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて—』有斐閣.
- 岩男寿美子・萩原滋 (1988) 『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析—』勁草書房.
- 岩切朋彦 (2019) 「日本語学校におけるネパール人学生の様相とその諸問題—福岡県 A 校に通うネパール人学生へのライフストーリーインタビューから」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』79-112.
- 岩切朋彦 (2018) 「「働く留学生」をめぐる諸問題についての考察(2) : 福岡市の日本語学校に通うネパール人留学生のエスノグラフィー」『鹿児島女子短期大学紀要』54, 37-49.
- 川喜田二郎 (2017) 『発想法 : 創造性開発のために 改版』中央公論社.
- 国土交通省総合政策局観光事業課 (2008) 「多様な食文化・食習慣を有する外国人客への対応マニュアル—外国人のお客様に日本での食事を楽しんでもらうために—」2021年8月26日アクセス
<<https://www.mlit.go.jp/common/000059429.pdf>>
- 徐光興・蔭山英順 (1994) 「在日中国人留学生の適応に関する実態と問題」『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学』41, 39-47.
- 総務省 (2006) 「多文化共生の推進に関する研究会 報告書 —地域における多文化共生の推進に向けて—」
- 田畑佳則・田中共子 (1991) 「広島大学における留学生指導の現状と課題—留学の動機を中心にして—」『広島大学留学生センター紀要』2, 43-64.
- 田中共子・高井次郎・神山貴弥・村中千穂・藤原武弘 (1990) 「在日外国人留学生の適応に関する研究 (1) —異文化適応尺度の因子構造の検討—」『広島大学総合科学学部紀要Ⅲ』14, 77-79.
- タバ・シャンカル (2020) 「第55章 ネパールのヒンドゥー教—信仰と日常的習慣—」日本ネパール協会編『現代ネパールを知るための60章』(pp. 336-341) 明石書店.
- 筒井久美子 (2018) 「別府市における留学生の体験と異文化的適応—多文化共生社会を目指して—」『立命館国際地域研究』48, 21-38.
- 寺田鎮子 (2020) 「第52章 祭り、儀礼、習慣—その変化—」日本ネパール協会編『現代ネパールを知るための60

章』(pp. 311-315) 明石書店.

中井芳野 (2021年4月18日)「アレルギーもハラルも表示、食の安全を守る絵文字「フードピクト」」『SankeiBiz』
2021年9月14日アクセス

<<https://www.sankeibiz.jp/econome/news/210418/ecb2104180830002-n1.htm>>

中野祥子 (2017)「在日ムスリム留学生の困難と対処方略からみた異文化適応」 岡山大学 博士論文

日本学生支援機構 (2021)「2020(令和2)年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2020.html>>

日本学生支援機構 (2020)「2019(令和元)年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2019.html>>

日本学生支援機構 (2018)「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2018.html>>

日本学生支援機構 (2017)「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2017.html>>

日本学生支援機構 (2016)「平成28年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2016.html>>

日本学生支援機構 (2015)「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2015.html>>

日本学生支援機構 (2014)「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2014.html>>

日本学生支援機構 (2013)「平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2013.html>>

日本学生支援機構 (2012)「平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2012.html>>

日本学生支援機構 (2011)「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2011.html>>

日本学生支援機構 (2010)「平成22年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2010.html>>

日本学生支援機構 (2009)「平成21年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2009.html>>

日本学生支援機構 (2008)「平成20年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2008.html>>

日本学生支援機構 (2007)「平成19年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2007.html>>

日本学生支援機構 (2006)「平成18年度外国人留学生在籍状況調査結果」2021年8月25日アクセス

<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2006.html>>

- 日本学生支援機構 (2005) 「平成 17 年度外国人留学生在籍状況調査結果」 2021 年 8 月 25 日アクセス
<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2005.html>>
- 日本学生支援機構 (2004) 「平成 16 年度外国人留学生在籍状況調査結果」 2021 年 8 月 25 日アクセス
<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2004.html>>
- 福岡市 (2018) 「平成 29 年度福岡都市圏における留学生実態調査—報告書—」
- 松原治久・岩隈利紀 (1993) 「外国人留学生相談の実態」 26(2) 『カウンセリング研究』, 146-155.
- 宮森千賀子・宮林隆吉 (2019) 『経営戦略としての異文化適応カーホフステードの 6 次元モデル実践的活用法』
日本能率協会マネジメントセンター. pp. 149-153
- 文部科学省 (2003) 「留学生受入れの概況 (平成 15 年版)」 2021 年 8 月 25 日アクセス
<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2003z.pdf>
- 文部科学省 (2002) 「留学生受入れの概況 (平成 14 年版)」 2021 年 8 月 25 日アクセス
<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2002z.pdf>
- 柳基憲 (2017) 「ネパール人留学生在の実態に関する研究—福岡で学ぶ留学生在を対象として—」
『都市政策研究』 18, 113-25.
- ネパール観光庁 (2020) 「ダサイン」 『ネパールへようこそ！ネパール観光庁発信オフィシャルウェブサイト』
2021 年 9 月 1 日アクセス<<https://ja.welcomenepal.com/whats-on/dashain.html>>